『編集者　漱石』

『編集者　漱石』（長谷川郁夫 著　新潮社）　定価:本体 3500 円＋税

そうして漱石を見れば、長谷川郁夫さんだけが、透徹して彼を見ることのできる場所にあったということだ。漱石はこれまで作家という位置、文豪という位置に収まりかえっていた。そこに編集者という光を当ててみれば、まったく違った光景が見えてくる。「すぐれた文学者は、誰れもが自らのうちに編集という機能を備えている」という冒頭の言が、骨の髄まで分かっているのは、実に長谷川さんしかいなかったのである。

「私が見るところ、日本の近代文学において最初の、そして最高の文学者=編集者は夏目漱石である」

長谷川さんはこう書く。漱石は本の形態を近代化した。それまで寝かせていた本を、縦に並べ、束を出し、背に文字を入れた。わが国最初の装幀家、橋口五葉を見出し育てたのは漱石である。

彼のところに出入りしたのはざっと数え上げても、小宮豊隆、寺田寅彦、安倍能成、中勘助、野上豊一郎、鈴木三重吉、伊藤左千夫、長塚節、志賀直哉、武者小路実篤、芥川龍之介、菊池寛……。

それだけではない。漱石は朝日新聞文藝欄の最終責任者に就任する。朝日新聞社史は「以後、この欄の評論、小説、読み物の選定はすべて漱石に一任された」と書く。しかしこれは、さらりと 1 行で書いてすまされることではない。例えば漱石は、文学的立場を異にする森鷗外や永井荷風、島崎藤村までを連載小説に起用する。のみならず、漱石と鋭く対立していた自然主義の作家でさえ登用している。

作家だけではない。随筆、評論、読み物、等々はすべて漱石が差配するのであり、漱石門下およびその知り合いは総動員である。その際の漱石の動機は、文壇の党派性ではなく、ただオリジナリティーと文章の力のみであった。

しかしそもそも、なぜ突然、漱石に「編集者」という存在が胚胎したのだろうか。長谷川さんは、そのもとを正岡子規に求めている。詩人の平出隆さんが「編集少年・正岡子規」という展示を企画したのを聞いたとき、「瞬時に子規が漱石の内面に潜んでいた編集機能を目覚めさせたのだと直覚した」。

正岡子規は「回覧雑誌の制作に熱中する、早熟な“編集少年”だった。/最初の制作は『櫻亭雑誌』。明治十二年の四月二十四日(推定)に第一号が、以後毎週木曜日に発行された」。子規はこのとき勝山学校の最終学年、12 歳ころであった。この歳で毎週木曜日に雑誌を発行する――確かに早熟の天才とはいるものなのだ。

けれども子規は、志なかばで結核に倒れてしまう。このとき長谷川さんの言う「無意識の触手の結合」が、子規と漱石の間に起こった。

漱石は英国留学直前に子規を訪ねる。漱石も子規も、これが今生の別れであることを覚

悟している。「この日、どんな言葉が交されようとも、無意識の触手が静かに絡み合っていたことだろう。『半死』の子規の『霊魂』が漱石の無意識にしっかり摑まれた様子が、私には想像されるのである。子規が黙ったまま頷いて、その表情が緩む一瞬までが確認される気がする。……子規の魂は漱石の意識の深層に宿る」。長谷川さんの創作とも見まごう、しかし見事な文章創造である。

漱石が死んでおよそ 100 年、長谷川さんが出てくるまでは、その全体像はわからなかった。考えてみれば、これもにわかには信じられないことである。けれども編集者にして作家であるということを、とことん突き詰めて考えることができたのは、長谷川さん以外にはいないということだ。

たとえば今、『吾輩は猫である』が誕生する瞬間を、虚子と漱石の心理を題材にして、長谷川さんの叙述を見ておこう。

「……虚子が編集者の役割を見事にこなして、漱石は発見されたのである。漱石の精神状態を読んでタイミングを図った、虚子の勘 を褒めるべきだろう。『今迄山会で見た多くの文章とは全く趣きを異にしたものであつたので少し見当がつき兼ねた』とあったところに、編集者としての喜びと同時に、不安と緊張が表現されている」

私はもう編集者の立場を離れて久しいが、こういうところに来ると、思わず手に汗を握りたくなる、膝が震えてくる。

しかし長谷川さんは名うての編集者であると同時に、超一流の著者でもある。するとどういうふうになるか。「漱石の方でも、身は緊張につつまれて、眼差しだけが自作の原稿を捲る虚子の指先を注視していたことと想像される」。長谷川さんは、漱石に乗り憑る。漱石の視線が、長谷川さんの視線にぴたりと重なり合う。

私は『編集者　漱石』を、ただ夢中で読んだ。我を忘れて、夜がすっかり明けるのもまったく知らなかった。

作家と編集者の関係といって一般の方が先ず思い浮かべるのは締め切りについてであろう。作家の自宅に編集者が行き、「先生、今日中にいただかないと死人が出ます」みたいなことを言い、作家が言を左右にして、或いは嘘を言い、時には正論中の正論を述べてこれから逃れ、なんとかやり過ごそうとする、みたいな攻防である。

しかしそうしたことはいまはもうあまりないように思う。というか、それ自体が多分にフィクショナルというか、おもしろくて受けるから強調されるだけで、いまも昔も実際は少し様子が違うのではないか、と思う。

というのはどういうことかというと、右の例だと作家は、書こうと思えば書けるのだけれどもその気にならないので書かない、という風に読むこともできるが実はそうではなく、かなり前からその気になっていて書こうとしているのだけれども書けないのである。

だからいくらお金を返せと言われても無い袖は振れないのと同じように、どのように熱心に懇願したところで書けないものは書けない。つまり作家は書けるものという前提が間違っているのである。

したがって作家と編集者の関係でもっとも緊張が高まるのは、そもそも書けない作家に編集者が書かせる、というところである。

つまりこの場合における編集者とは書けない（才能の無い）作家に売り物になる原稿を書かせる人ということになる。ということは。そもそも書けなくてよいのなら、いい編集者さえつけばどんなアホでも作家になれるのか、という話になるが、まあそうだと言えばそうというかこの場合、アホとかかしことかいうのはあまり関係がなくて、その編集者が書かせようとして発した気合いのようなものを受け取るための受容体のようなものを有しているかいないか、ということに実はなる。

その気合いのようなものというのは意識的な言葉でないものも多く、また右の例のように家に来て、「今日中に書け」といったものでもなくて、何気ないちょっとした一言だったり、二十年前に「これ読んでみたらどうだ」と手渡された雑誌の記事のコピーだったりすることもあって、己ひとりの力で書いたと思いつつ、ふとあるとき、「あれ？　これとこれってもしかしたら繋がって関係あるんじゃないの？　もしかしたらあのときのあの一言に導かれて書いたんじゃね？」と事後的に気が付くようなものであったりする。

なんてことを思うのは、長谷川郁夫著『編集者 漱石』を読んだからで、編集者を長くした筆者は誰もが作家としか思っていない夏目漱石の、明治から大正にかけて、中勘助や長塚節や芥川龍之介や谷崎潤一郎や志賀直哉といった人たちに手紙を書いて原稿を依頼して書かせた、編集者としての側面に着目してその作品を中心としてではなく、その人の部分を主に描いている。

自分のような不勉強な読者にとってはそれだけで興味深くて、というのは夏目漱石について書かれたものをこれまで読まないでもないが、やはり夏目漱石ともなると最初から、えげつなく高いところにいる人、みたいな感じがあって、人を書くにしても、そこに敬意を含んだ作意というか、作品と経過した時間とその後の経緯から逆流した漱石という物語が入り込んで実体的ではなかったが本書では、そこのところ、というのは作者が編集者としての経験から実感する、作家が書く／作家に書かせるという点での、実際的な作業というのはすなわち銭の計算、装丁や締め切りといったこと、を通じて、文学的でない夏目漱石が生々と現れて息もつかずに読んだ。といったところ、例えば連載を約束して「途中まで書いたんだけどやっぱ納得いかないんで」と言って直前に断ってきた、見上げた根性の志賀直哉に対しての漱石の、半ばは作者として半ばは編集者としての対応などもいい感じで紹介したいけれども、それは読んだ方が絶対におもしろい。

そして本書のキモというか中核の部分は夏目漱石があのような文業を遺したその根本・根底のところに、ありえないほど遠大な志を持っていた正岡子規の存在があって、それは右に申し上げた、編集者が作家に注入する気合いのごときものが、子規によって漱石に注

入せられてあり、その漱石によって気合いを注入せられた弟子や「新思潮」の人たちが書いていくという、きわめて文学的なものである。もっというと編集者的ではなく作者的。
　出てくるのは文学史上の人ばかり。でも森田草平はアホ扱い。内田百閒はガキ扱い。やはり一番恐ろしいのは編集者なのか。
[レビュアー]町田康（作家）
1962 年大阪府生まれ。97 年「くっすん大黒」で野間文芸新人賞、2000 年「きれぎれ」で芥川賞、05 年『告白』で谷崎潤一郎賞、08 年『宿屋めぐり』で野間文芸賞などを受賞。他著書に『ギケイキ』等。新プロジェクト「汝、我が民に非ズ」のヴォーカルとしても活躍中。「池澤夏樹=個人編集 日本文学全集」では『宇治拾遺物語』を訳した。

新潮社 波 2018 年 7 月号 掲載

2018-8-4 編集者漱石　長谷川郁夫著：日本経済新聞

編集者漱石　長谷川郁夫著
文芸界の革新担った企画力
2018/8/4 2:00 朝刊
夏目漱石が朝日新聞の連載小説を差配していた頃、執筆を約束していた志賀直哉が掲載直前に断ってきたことがあった。構想した時点と人生観が変化したからだという。「断り方は道徳上不都合」ながら、「藝術上の立場からいふと至極尤（もっと）も」と漱石は理解を示した。だが紙面に穴を開けるわけにはいかない。

そこからが編集者・漱石の面目躍如たるところだった。新進作家の短編を集めてしのぐことにし、方々に依頼状を書いた。谷崎潤一郎、武者小路実篤、里見●（ゆみへんに享）、久保田万太郎、小川未明……。苦肉の策とはいえ実現した企画は、来るべき大正文学の見取り図といえる。漱石は彼らを褒め、飛躍の舞台を用意した。

編集者としての働きぶりに焦点を当てたこのユニークな評伝で、著者が描き出すのは文芸界の革新という正岡子規の志を内面化した漱石の姿である。「莫逆（ばくげき）の友」が夭逝（ようせい）し、いわば漱石は子規となった。その濃密な関係は「精神のリレーなどという表層的な美辞で片づけられるものではない」と著者は記す。

漱石は晩年、芥川龍之介らに宛てた手紙で「文壇にもつと心持の好い愉快な空気を輸入したい」と、未来を託した。本書の結語は「漱石から放出された胞子が、いまもなお、消滅することはないと信じたい」。文芸編集者だった著者の、衷心の声だろう。（新潮社・3500円）

漱石散策・地図と年表
http://www.s-kawano.net/s-kawano/2017/03/post-198.html